

中国労働市場のジェンダー分析 — 経済・社会システムからみる都市部就業者



■ 石塚 浩美 著
■ 勤草書房
■ 2010年初版
■ 3,800円(税別)

男女共働きが一般的である中国で、雇用の男女平等が実現されているのであろうか？本書はこの素朴な疑問を出発点として、市場経済化以来30年あまり経つ中国において、男女間に雇用格差があるか否かを、ジェンダーの視点に立ち、都市部の世帯や企業の調査から実証分析を試みるものである。中国は1949年以来の計画経済から1978年以降の市場経済への体制変換により、女性の就業をとりまく経済・社会システムは大きく変化した。

本書は女性就業の歴史的な変遷を、市場、企業、家庭の3つのレベルから検討し、法制度や慣行の変化と女性就業の実態について分析し、読み解こうとするものである。中国にはこれまで男女別統計が少なく、そのため女性の就業分析も数少ないが、本書は中国女性の就業・非就業の実態、昇進の男女間格差やワーク・ライフ・バランスの状況についても分析を行っており、大変興味深い。女性の無業者には、男性に比べ早い定年退職者(50歳)や解雇による者(40歳台)、専業主婦などが含まれる。

一人っ子に質の高い子育てをするために専業主婦を選択する女性が、若い世代に現れている状況は、経済・社会システムの変化や「女は家に帰れ」論争と無縁ではないであろう。

ワーク・ライフ・バランスと中国の現状

ワーク・ライフ・バランスとは、仕事とそれ以外の生活(家庭生活、勉学、スポーツ、芸術あるいはボランティアの社会活動など)を調和させて生活の質を高めることで、最近我が国では少子化対策の観点からワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)が問題にされるようになった(『現代人口辞典』)。本書の北京市調査(2004年、1,132世帯)によると、中国では雇用労働女性の就業時間(7時間40分)は、共働きの夫(8時間23分)に比べ、0.92倍と差は小さいが、家事時間は夫(50分)と比べ約2倍で、性別役割分業規範の根強さを示唆するものである。

早瀬 保子 (元日本貿易振興機構アジア経済研究所研究主幹)



もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら



■ 岩崎 夏海 著
■ ダイヤモンド社
■ 2009年初版
■ 1,600円(税別)

ある事情から、突然、都内の公立進学校の野球部のマネージャーになった高校2年の女子生徒が主人公。弱小野球部を甲子園に出場させるという壮大な目標を立て、目標に向かってさまざまな難関を乗り越えていくという青春小説風のストーリーであるが、主人公が目標を達成するために用いたのが、「マネジメント」という概念を確立したドラッカーの経営手法である。ピーター・ドラッカーはユダヤ系の経営学者・社会学者で、アメリカに亡命後、巨大企業の組織管理手法の研究を行い、多くの著作を残している。

本書を読み進めていくうちに、そもそも「マネージャー」とは何かということから勉強を始めた主人公と共に、読者もマーケティング、イノベーション、規模の問題と最適規模、自己管理人事といった経営学の概念と、組織における具体的な実践例を自然に学ぶことになる。甲子園出場という目標と公立高校

野球部という設定の実践例でわかりやすいのが、本書がベストセラーになっている理由であろう。同時に、社会の各所で構造のひずみや疲弊・閉塞感があふれる中で、マネジメントさえすればうまくいくはずという希望を読者に与えていることも、本書の読後の爽快感の一因となっているようだ。

女子マネージャー

本書の「あとがき」でも触れられているが、「女子マネ」にはスコアを付けたり後片付けをしたりするという下働き的なイメージがある。男子の運動部に女子マネが付くのが一般的で、逆はあまり聞かない。そういう芸能人のマネージャーも、実態は付き人に近い場合もあるようだ。日本におけるマネージャーの地位は、なぜこんなに低いのか。実際に「汗をかく」プレーヤーを絶対視しそう、組織管理の重要性が理解されていないのが一因だろう。

湯浅 はるみち 墓道 (九州国際大学副学長)



恥と名誉 — 移民二世・ジェンダー・カーストの葛藤を生き延びて



■ ジャスミンダル・サンゲーラ著
■ 阿久澤 麻理子 訳
■ 解放出版社
■ 2010年初版
■ 2,200円(税別)

本書は、インド系イギリス人、二世女性の自伝である。ジェンダーに基づく暴力の悲惨さが臨場感を伴って伝わってくる。「女性であること」は、まるで「男の所有物であり、人間としての人格は存在しない」かのような実態が記されている。惨いDVを受け死に直面する女性に対して、コミュニティの男性「指導者」は次のように命令した——そんなこともあるでしょう。でも、男性が腹を立てたら、あなたの方が気を落ち着けなければなりません。沸騰したミルクが吹きこぼれそうな時、それを沈めるのが女性の役割なのですから——と。その女性は夫の元に戻され、そして殺された。本書で言う「恥」とは、女性が男性中心・支配社会を乱すことであり、「名誉」とは、その社会を守ることである。

筆者はあるがままに男性を愛し、子どもを育て、理不尽と闘いながらも自己を内観しながら生き抜いている。本書は、イギリスにおける移民コミュニティを中心としたものであるが、その内容は多くの女性が共感でき追体験できるものであろう。なぜな

らば女性への暴力は、ほぼ世界のあらゆる地域、文化、社会、民族、階層で行われており、男性優位社会による「女性への呪縛」が本書執筆の背景にあるからである。

ジェンダーに基づく暴力

「女性であること」「女性の性役割」に起因した、いわれなき暴力である。その暴力は女性の生涯を通じて行われ、男性を優位とする社会の「文化」「暗黙」「許容」が、女性への暴力を熾烈にし、殺人さえも横行させている。出産前には強要された妊娠・性選別による中絶、乳幼児期には女児殺し、食物や医療ケアへのアクセスに関する差別、子ども時代から思春期には性器切除、教育へのアクセスに関する差別、強制結婚、妊娠・出産期にはパートナーからの虐待、夫によるレイプ、ダウリーに連携した殺人、「名誉殺人」などがある。

李 節子 (長崎県立大学教授、日本グローバルヘルス研究センター所長)

Intimate Partner Violence: A Health-based Perspective

(仮邦題『親密な関係にあるパートナーからの暴力—健康の視点から』)



■ Connie Mitchell,
Deirdre Anglin 編著
■ Oxford UP
■ 2009年初版
■ 8,325円(税別)

本書は、親密な関係にあるパートナーからの暴力を健康の視点から探求し、公衆衛生政策に資する形で成果を提示している点で、従来の研究を凌駕する。また、文献レビューにより本研究テーマの最新の知見や調査間の格差や議論を整理し、提示している。性暴力被害者支援者はもとより、ヘルスケア専門職者、研究者、保健師、政策決定者、学生まで活用できる汎用性の高い社会資源である。

本書は第1に、本テーマの研究手法として犯罪司法アプローチよりも公衆衛生アプローチのほうが有用であることを議論する。パートナーからの暴力が親密な関係と空間で起こるゆえに複雑性を有し、暴力の周期性と激昂性ゆえに健康に影響し、その影響の度合いは健康政策とも関係しているからである。

第2に、被害の臨床例をもとに、暴力が健康に及ぼす影響を示し、公衆衛生政策がパートナーからの暴力に対し予防と介入を行うことが必要であるとの根拠を提示している。

第3に、グローバルヘルスと国際的な性暴力研究の成果をふまえ、保健医療制度の改善、暴力の予

防・介入プログラムの実施などを含む、包括的な公衆衛生政策の概要を提示している。

第4に、親密な関係にあるパートナーからの暴力の根絶には個人、家族、地域、国際など多様なレベルのアプローチが必要で、特に政策・実施レベルでの取組みが重要であることを指摘する。また、暴力の容認から拒絶へと社会規範を根底から変革することが必要で、またそのことは実現可能であるとする。

親密な関係にあるパートナーからの暴力

現在あるいはかつての配偶者や恋人など親密な関係にある2人の間に起こる暴力で、社会構造としてある「男性」「女性」間の権力関係が背景にある。その形態は身体的、精神的、性的暴力に分類されるが、いずれも重複連続した形で起きる。身体的暴力には殴打、平手打ち、凶器を用いた脅威など、精神的暴力には罵倒、行動や交友関係の監視、セックスを拒否したことに対する脅威など、性的暴力にはセックスの強要、避妊具使用の拒否・妨害による妊娠の強制などが含まれる。

エリザベス・ミラー (カリフォルニア大学デイビス校医学部准教授、医師)